

小 論 文

2025 年度（令和 7 年度）

入 学 試 験 問 題

受 験 番 号	
---------	--

注 意 事 項

- (1) 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- (2) この問題冊子は 2 ページあります。問題は 1 問です。
試験中に、問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れなどに気づいた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
- (3) 問題冊子の表紙の受験番号欄に受験番号を記入してください。
- (4) 解答用紙の受験番号欄に受験番号を記入してください。
- (5) 問題冊子のどのページも切り離してはいけません。
- (6) 辞書機能や計算機能、通信機能等をもつ電子機器類全ての使用は禁止します。
使用している場合は不正行為とみなします。
- (7) 試験終了後、解答用紙は持ち帰ってはいけません。この問題冊子は持ち帰ってください。

問 次の文章を読み、下線部(1)について、あなたの考えを 800 字以内で述べなさい。

ハイデガー*は死のことを「この上なく自己自身のものであり、他との関係を絶した、追い越しえない可能性」であると考えました。死は「個別性の真理」(ヘーゲル*／ブランケンブルク*)なのです。

ところがこのような死が、二人称的な場面、つまり「わたし」と「あなた」がひとつの親密なまとまりをつくっている「われわれ」の場面では、すっかり違ったものになってきます。二人称的な場面とは、生物学的にいうと、集団的生命の共有を実現している個体どうしが関係しあう場面を指します。家族集団、友人、強い思想的、宗教的、政治的なきずなで結ばれた同志たち、そういった集団を考えることができるでしょう。そのような「われわれ」集団では、個人の死はもはやその人ひとりの死とはいえませんが、もちろん、そのような集団に属していても、死んでゆく当人にとっての死は、その人ひとりで死ななければならない出来事です。しかし二人称的な場面で、死んでゆく人を見送る側の目から見ると、死はもはやその人ひとりのものとはいえなくなってくるのです。

そのような共生的な「われわれ」集団では、それぞれの個人は自己自身が生きることそれ自体を通じて、集団全体の生命を分有しています。仲間のだれかが死んだとき、それはたんにその人が死んだというだけのことでなく、その集団全体の生命が——ということはその集団を構成しているメンバー一人ひとりの生が——それによって痛切な変化をこうむるということなのです。そこでは死は死んでゆく人個人の出来事ではなくなって、仲間たち全員に分有される、この上なくアクチュアルな出来事になります。「死の連帯性」という言いかたをしてもよいでしょう。

自分自身の(一人称的な)死のアクチュアリティ*を、生前に体験することはできません。しかしわたしたちは、自分がいずれは死ぬという事実、この最大限の確実さをもつ客観的なリアリティを、いわば三人称的な知識として知っているだけでなく、自分自身が死すべき存在だということを、ある種のなまなましいアクチュアリティとして一人称的に感じとつてもいいのではないのでしょうか。わたしたちが自分の生を生きているというとき、そこにはどこか、自分の死を生きている」とでもいえるような意味あいが含まれてはいないのでしょうか。自分の生きている一瞬一瞬が、その生の根底

に死をふまえて生きている、という感じだといってもよいでしょう。だからこそ、人間の存在は「死にかかわってあること」(ハイデガー)だといえるのです。

これは、他人のリアルな死についての三人称的な知識を、知的なレベルで自分自身へ「代入」して出てきた答えというようなものではありません。それはそんな知的な操作とはまるで無関係な、存在の奥底で感じとられるアクチュアルな感覚なのです。それは二人称的集団のなかで他者たちと分有している死の現実であり、「死の連帯性」というアクチュアルな現実のまっただ中で自分自身の死をも感じとるという事態なのです。

二人称的集団の中で個人が分有している生命のアクチュアリティは、個々人の有限の、つまりリアルな死によって限られた生とは別次元の、非・不連続的な「生命そのもの」のアクチュアリティです。この「生命そのもの」は、個々の生きもののように「どこかに生きている」ものではありません。だからこのアクチュアリティは、個別的な有限な生命からみれば、ある意味で「死」のアクチュアリティとして、つまりすべての生きものがそこから生まれ、そこへ向かって死んで行く「死」のアクチュアリティとしてそれ自身を示すに違いないのです。生と死の差異が、見方によっては生それ自身としても死それ自身としても姿を現すのは、けっして不思議なことではありません。

他者との二人称的な「われわれ」の関係に立つことによって、わたしたちはそこではじめて、自分自身の生と死についても、それとアクチュアルにかかわることができます。医者が、自然科学的・客観主義的医学の執行人としてではなく、人間学的な医学⁽¹⁾あるいは医療の実践者として、患者との個人的・人格的な二人称関係に立つとき、そのときにのみ生と死は、医者にとっても患者にとっても、その豊かなアクチュアリティを示すことになるでしょう。患者の生と死を自分自身のアクチュアリティとして生きること、それは患者との出会い、患者との境界そのものを自分自身の主体として生きることと同義でありますし、患者との関係を患者の主体として扱うことも同義なのです。

(木村 敏『からだ・こころ・生命』による)

*ハイデガー：ドイツの哲学者(1889－1976)

*ヘーゲル：ドイツの哲学者(1770－1831)

*ブランケンブルク：ドイツの精神病理学者(1928－2002)

*アクチュアリティ：科学ではとらえられない現実